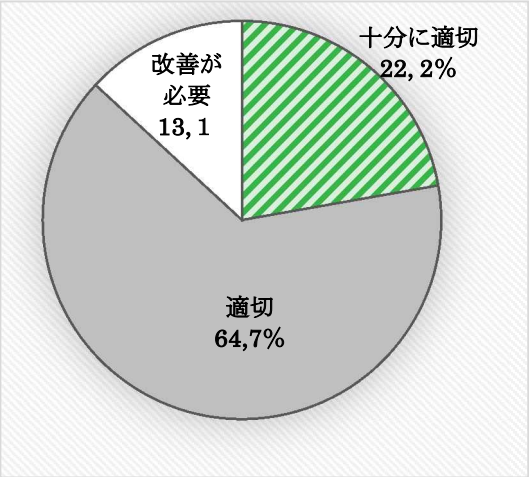
7　成果と課題

成果と課題については、2 つの観点（職員へのアンケート調査、課題別グループの実践）からまとめていく。

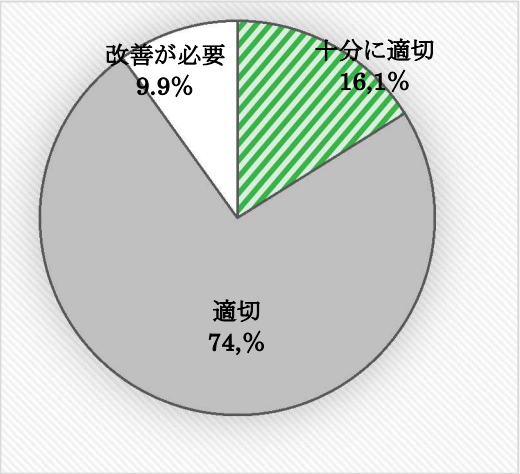
（1）H28・29 年度校内研究についての職員アンケート調査の結果から（回答数 90）

Q１：主題・副題は学校の実態に即して適切であったか



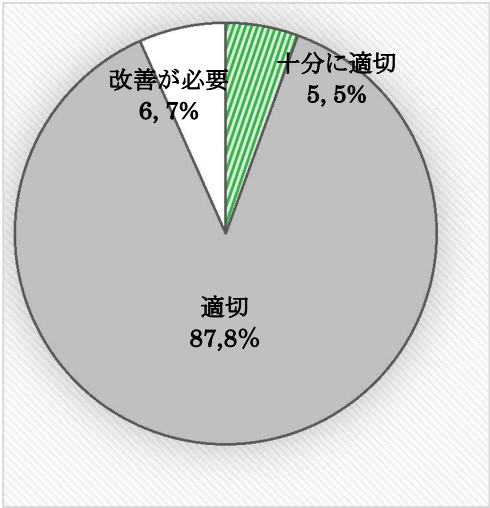
＜自由記述より抜粋＞
○他校舎を知るきっかけとなり、縦割りグループでできたのは良かった。
○清明ならではの主題設定であった。
●課題が大きすぎたようにも思う。
●共通の合言葉となるようなサブテーマがあると、もっと研究としての一体感があった・

Q２：課題別グループの実践を通して、研究目標に迫ることができたか



＜自由記述より抜粋＞
○現在の課題を明確にし、学部・校舎を超えて話し合いながら迫ることができた。
○課題別グループには、各学部の職員が所属しており、それぞれの視点での情報交流や求める到達度などについて共有することができた。
●グループ内での交流が不十分であった。
●迫ることができた部分と学部や校舎を超えての研究に不十分さを感じたところもあった。

Q３：適切な研究推進計画が立てられ、協働研究となる体制がとられていたか



＜自由記述より抜粋＞
○SV にてそれぞれの進捗状況を知ることができるようにしてもらったのは良かった。
●年度をまたぐと所属が変わり、状況も変化するため、十分に内容を深めることができなかった。
●校舎が異なると集まることが難しく、話し合いが持ちにくかった。
●協同までには至らず。

Ｑ４：６つの課題別グループ研究で、良かった点・困った点（自由記述より抜粋）

〇自分の関心のあるテーマについて、校舎・学部を超えて話し合うことができた。

〇小集団で集まることで、気軽に意見交換をすることができた。

●学部が偏ってしまい、完全な縦割りグループとならない。

●内容をまとめ、話し合うなどは一堂に集まることが難しく、担当者に大きく負担がかかった。

ア　成果

設定として、研究のテーマを６つに分けたことで、職員が自分の関心のある課題への取り組みが可能であった。

他の学部の実践を知ることができた。２校舎３分教室という本校においては、他校舎学部の実践を知り、そこからフィードバックできるものも多い。

イ　課題

他グループとの情報の共有化。

年度が変わり、所属の変更などにより、継続的な研究ができなかったなど、この研究期間において、計画的な推進が推し量れなかった。

（２）各課題別グループの実践から

課題別グループの小グループの実践については、「SV-共有-校務部-06 研究部-H29　小グループの実践」にアップしてある。

ア　成果

・実態把握表によるチェックや行動記録をとることにより、客観的に幼児児童生徒の課題や成長を見ることができた。

・対象とする子どものねらいを小グループ内などで確認し合うことや支援の手立てを振り返ることにより、支援の手立ての明確化、教師間の共有化ができた。

・授業の終わりに活動の振り返りの時間（作業日誌、学習ノート、個人の記録等）を設定することで、学習の定着を図ることができた。

・2 年間の学習の継続により、仲間意識などを育てることができた。

・ICT 機器などの活用により、児童生徒のみならず、教師側にも新たな気づきがあった。

イ　課題

・縦割りというグループ編成であったが、同一校舎のみのグループでの研究推進があるなど、全校単位での縦割り組織が出来なかった。

・無理のない形での学習を継続して、児童生徒が認め合い、仲間意識を築けるような内容・場面の工夫。

・蓄積された活用事例を整理し、共有できるようにすること。